
運命には逆らえない

上村 啓人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命には逆らえない

【Nコード】

N3959P

【作者名】

上村 啓人

【あらすじ】

神様って奴はどんな性格をしているのだろう、いつものように朝を迎えると、理由はわからないけど、女の子になっていた。もしこれが運命って奴ならば、俺は逆らってやる。

超金持ちの幼馴染や、重度の兄好きな妹や、頭のねじが10本位外れている先輩を巻き込んで、運命に抗おうとするバカのお話
毎週金曜日に更新予定

妹の日常

ゆっくりと目を開けた、そしていつもの様にまだ鳴っていない置時計に手をのばして、アラームを止める。

時間は五時五十五分、アラームの設定は六時

「ふ~~~~、よく寝た~~~~」

寝ている間に固まった筋肉をほぐす為、少し背筋を伸ばすといい感じに筋肉がほどけた。

頭がちゃんと目覚めるとすぐにタンスを開け、一番お気に入りの服を着た。

「えへ、お兄ちゃん気に入ってくれるかな」

私はお兄ちゃんのことを考えながら部屋を出て、台所に向かった。今日の朝ごはんがいいかな、やっぱりお兄ちゃんの大好きな白ご飯に、お味噌汁かな、でも今日は洋風の気分だし、どうしようかな。少し悩んでから、食パンにチーズ入りスクランブルエッグとトマトにした。

テーブルに家族5人分の朝ごはんを用意してから、毎日で一番楽しみをする為に、お兄ちゃんの部屋の目の前に着た。

ごはん、ふ~~~~

ドアを開け、少し散らかっている、お兄ちゃん部屋に入って起こす、それが今私の一番の楽しみ。

だって、寝起きでぼ~~~~としているお兄ちゃん、とってもかわいいんだもの。

「お兄ちゃん、朝だよ、起きろ」

パパや、お母さん、私の双子の弟が目覚めないような声の大きさに言いながら、お兄ちゃんの部屋に入った。

「だれ」

いつものように敷布団が敷かれています、その上で寝ていたのはお兄ちゃんじゃなかった。

とても美人な女の人が寝ていた。

妹の日常（後書き）

初めての投稿です、かなり読みにくいと思いますがご勘弁ください。
これから、連載するにあたって、直していきたいです。
感想があればどうぞ送ってください。

「どつする」(前書き)

間違っていた所をなおしました。

すいません、次からは出来るだけ間違いを少なくします。

「どうする」

階段を上ってくる音が聞こえる。

いつもの様に妹が起こしに来た。

いつも入るなって言っているけど、今日もどうせ入ってくるのだろう。

「お兄ちゃん、朝だよ、起きろ」
ガチャ

ほら、今日も勝手に入ってきた。

その次は、そうそう俺の体を揺らすんだっけな。

「……………」

あれ、何で何もしてこないんだ、いつもだったら、寝ている俺を思いつき揺らして起こすのに、どうしたんだ。

少し心配になったから、上半身だけを起こし、寝ぼけた頭で外行きの服を着ている妹を見ると、目を満丸にしてビックリしていた。

あれ、何でビックリしているんだ。

妹に見つかってヤバイのは、この部屋の隅に隠しているはずだ、どうしてビックリしてるんだ。

部屋に入ってきた妹は、じっと動かずにその顔には驚きと、絶望があったが、少しずつ正気を取り戻し、ぽっかり空いていた口を動かして一言言った。

「…だれ…」

だれ、その言葉は誰に言ったのだろう、この部屋には俺しか居ないので、妹が知らない奴はいない。

しかし、妹の言葉はまさしく俺に向けられて言われている様だ。

何のことが理解俺は、取り合えず俺以外に誰かいないか顔の向きを変え、部屋の中を見渡した。

その時、部屋の中に有った鏡が、高校生ぐらいのとても美人の顔を写した。

誰だこの美人は、真っ先に思い浮かんだ疑問を晴らそうと、言葉を出そうとした時、ある事に気付いた。

その美人はベットの上でまさに俺が居る所に居る。

「なっ……………」

あまりの驚きで言葉は出なかった、いや、出せなかった。

僕が、僕が女になっている。

なぜ、いつ、どこで、どうやって、そんな疑問が浮かび上がる。

「えっと、失礼しました」

妹は僕が驚いている中、突然声を上げ、ドアを勢いよく閉めた。

しかし今の僕にはそんなのどうでもよかった。

まず、下が着いているのかを確認し、二つの小さな胸を本物かを調べてみたけど、どうやらどれだけ確認しても本物だった。

「どうしよう」

少し時間がたち、冷静に考えるようになってからこれからの疑問が浮かび上がった。

いつも僕をよく見てくれている妹でさえ、この姿の僕を判らなかった。

きっと誰が今の僕を見ても僕だと気づかないだろう。

それ程に変わっている。

顔はもともと中の上位の顔をしていたけど、今鏡でこの顔見ると、元の面影が全くなく、綺麗でどこか大人の魅力を出す美しい顔に変わっているし、体格は肩幅がなくなり、手足がスッと伸びており、胸は少ないけどとても美しい身体つきをしており、特に髪なんてもと少し癖毛の黒髪だったのに、今では銀髪の綺麗なストレートに変わっている。

そんな僕をこの家の家族はきっと僕だと気づかない。

「どうしよう」

今、この家の中で居ることは良いことじゃない、これだけ変わっていればどれだけ説明しても誰も判らないから、家族に説明する事も出来ないし、どうする。

寝ぼけた頭じゃなくて、確りと目覚めた頭で再びこの部屋を見待たす。

さあ、どうしようか。

「誰だろ、あの綺麗な女の、やっぱりお兄ちゃんの彼女かな」

ドアのすぐ手前で、私は動けなくなっていた。

誰だろあの女のひと、不審者かな、でもこの部屋で寝ていたってことはその可能性は低いし、でもお兄ちゃんの彼女だったら、そう考えたとともじゃないが扉を開けられなかった。

ガサゴソ、ガサゴソ

さっきから小さな音が部屋の中から聞こえてくる。

でも、会話をしてなさそうだけど、何をしているのだろう。

色々な考えをしているうちに、さっきまで聞こえていた音がいつさいしなくなっている事に気づき、不意に私の心の中に不安がよぎった。

覚悟をし、音が出ないように扉を少しずつ開けていった。

そこに飛び込んで来た風景を見て驚愕した、少しずつ開けて行つた扉を、勢いよく開け、私の見間違いではない事を確認する為にもう位置ど部屋を見渡した。

この部屋には、私が思い描いていた風景はそこには広がっておらず、そこにはさっきまで居た、銀髪の女性の姿も、お兄ちゃんの姿も無くなっていた。

「何処に行ったの」

自然とそんな一言が出てきた。

「どじする」(後書き)

読んでくれてありがとうございます。

字の間違いや、文が変とこころがあればどんどん言ってください。

とりあえず（前書き）

アップ遅くなつてすいません。
次からはちゃんとします。

とりあえず

僕の名前は高須 連。

性別は男、顔は中の上で頭の出来はともいい。

どれ位かというところ、全国模試で10位以内に入った事があるぐらいだ。

運動は、男なら様々な部分で必要だと思い、全体的に細いけど力はある。

家族構成と言うと、父と母親と最近なんだか反抗的な弟の信と、やたらと僕に甘えてくる妹の理沙^{リサ}が居る。

なぜこんな自己紹介みたいな事をしているのかと言うと、今の自分に起きている状態をちゃんと確認したかったからだ。

深呼吸をし、覚悟を決め、細くて肌理が細かく大理石で出来た彫刻を思いおこさせる腕でゆっくりと、生まれたての赤ちゃんに触る様に、慎重に自分の胸を触った。

むにゅ

僕は倒れそうになるのを今まさに消えかけの精神力で持ちこたえ、

「男」ならあるはずの物を確かめるために、ゆっくりと手を股に伸ばした。

ピト

僕のは確かに大きさに自信は無かったが、それでも人並の大きさはあったはずだ、けれどそこには「男」の証は無かった。

周りに人が居ない事を確認してから大きく息を吸い、叫んだ。

「なんで女になってんの~~~~」

朝、理沙にいつもの様に起こされると、うんと認めたくないけど女になっていた。

理沙は当然、ある程度の事なら慣れている僕でもさすがにビックリした。

助かったのは、理沙が何を勘違いしたのかすぐにドアを閉めてくれた事だ。

お陰で、何とか落ち着きを取り戻した僕は、災害時などの非常時用のバックを持ってベランダから飛び降りた。

連として2階にあった部屋から降りるのは、流石に覚悟が必要だったけど、この姿を見た理沙の一言目が「だれ」だったからきつとどれだけ説明しても誰も信じてくれないだろう。

まあ当然だろう、つい昨日まで男だったのに朝になったら、銀髪的美少女って、誰が信じてくれんだよ。

それでベランダから飛び降りた僕は、少し遠くにある河原まで走った。

ここならめったに人が通らないから。

ついでに、非常用バックの中身も着いた早々確認しといた、手持ちの物の確認は大切だから。

中に入っていたのは、10万円の現金と、男女用の衣類がそれぞれ3着ずつに保険所のコピーや、カップ麺とインスタントのカレー5日分と、鍋やガスコンロなどが入っていて、数日はやっていけそうだ。

ついでに言えば、今着ている服は寝巻だ。けれど僕の寝まきはよく外にすぐに出れるようしていたから、他人から見ると寝巻に見れない物だ。

一通り状況を確認したのち、もう一度女になったのかどうかについて調べたのがついさっき、流石に嫌になる。

どうやら完全な女性になっているようだ、しかもかなりの美人に。けれどどうやら胸は少ない方らしくて助かった、もしこれで巨乳だったら泣き叫んでいただろう。

これからどうしよう、何をすれば元に戻るのか、何が原因でこんな事になったのかを調べたいが、まず何をどう調べたら良いのかわえ分らない。

「寝よ」

いくら考えても答えが出ない問題なんて、面倒くさいったらありやしない。

もう、考えるのがもう面倒くさいので寝ます。もしかしたら起きた時に治ってる事もありそうだし。

連は大きく大の字の状態で、河原の芝生の上に寝っ転がった。

「ふゝ、あゝあゝ」

連は大きくあくびをしながら、髪や服に着いている葉っぱを取っている。

よく寝た、いったい何時間寝たのだろう、日がもう暮れようとしているという事は少なくとも、5時半位かな。

起きた時は、男に戻っていないか期待しがどうやらその変化は無かった。

「いつになったら、治るんだろう」

ヒューと良い風が吹くのが、余計にむなしさを出した。

これからどうしよう、と結局寝る前と一緒に問題が立ち上がったが、野宿だろうと何だろうともう連にとってはどうでもよくなっていた。

コーヒーでも飲むか

寝ている間に盗まれないように、隠していた非常用バックから財布を取り出し、自販機に向かって歩き出した。

ピッ、ガタン

コーヒーを飲みながら、何処で寝ようかなと考え事をしている連の片が突然叩かれた。

連は突然片を叩かれた事に、反射的に振り返るとそこには、20〜22位の男が三人居た。

「彼女一人なの、一人ならさ俺らと遊ばない、今ちようど知り合いの一人が来れない事になって困ってたからさ」

とりあえず（後書き）

本当にすみませんでした。

文章の書き方を途中で色々と変えたので読みにくいかと思いますが、次からは安定させていきますので許してください。

それと、これからは更新が不定期でしたが、これからは毎週金曜にはアップしたいです。

誤字や間違い箇所があったら言ってください。

家の中（前書き）

新年明けましてよろしく願います。

そして、先週アップできなくてすいませんでした。

用事がありバタバタとしていたら金曜を過ぎてしまいました。

でもこれからは、ちゃんとしていきたいと思うのでどうぞ、温かい目で見てください。

家の中

連の肩を突然叩いたのは、20〜22位の若い典型的なチャライ男、三人組だった。

突然のことに連は驚いたが、もとは男なので、怖いという感情よりか、面倒くさいと思っていた。

まあ、この容姿なら声を掛けられても不思議は無いな、でもどうやって追っ払おうかな。

「すぐそこに良い店があるんだ、お茶だけでもどうよ」

左側に立つ茶髪の耳にピアスをしている男が、少し息を荒げながら声を掛けてきた。

しかし、連は眉間にしわを寄せ、少し睨む顔をしながら荒っぽく答えた。

「いえ、用事があるので断らせてもらいます」

それだけ言いさつとこの場を離れようと、足を一步出したところで右側に居たロン毛の金髪男が連の前に出た。

「そんなつれない事言つなよ、どうせ用事なんて無いんだろ、それだったら俺らと一緒に遊ぼうよ」

連のつれない態度に、苛立ちをおぼえた様で、言いながら連の腕を掴んだ。

少し危機感を抱いた連は振り払おうとしたが、金髪が確りと掴んで離さなかった。

「離してくれませんか、急がないと用事に遅れてしまうんです。」

今度こそ確りと、不快な感情を表に出しながら言った。

さつさと逃げないとやばい、今の僕には帰るところが無いからこんな奴らにつかまったら、どうなる事やら。

「だから、本当は用事なんて無いんだろ、だってついさっきまでここでゆっくりしてたじゃね〜か」

金髪男が掴む力を強くしながら、一步二歩と近づいてきた。

「いや、離してください」

いい加減女言葉を使うのが嫌になったが、それよりこの男たちをどうにかしないとそれこそ面倒だ。

元の姿なら、こんな程度の力に負けないのに、この姿だと全然力が無いから振り払えない。

連はありったけの力で振り払おうとしたが、女の細腕では男の力に勝てなく、腕を掴む手を振り払えない。

「いいじゃねえか、どうせ髪を銀髪に染めるぐらい遊んでるんだからさ」

真ん中に居た背が一番高い鼻ピアスの男が、金髪の男が掴んでいる腕とは反対の腕をぐっと引つ張り、連を連れて行こうとした。

やばい、どうしよう、振り払いたいけど力が無い。

男どもの頭の中はピンク色の未来を想像し、連は目の前に広がっていく危険にどうする事も出来なくて、唇を噛んだ。

出来れば使いたくなかった手だが、やるしかないか。

連は意を決し、手を引つ張る男に対して行動を起こそうとした時、いきなり連の腕を引つ張っていた鼻ピアスの男が倒れた。

「お待たせ、さあ、行こうか」

連は反射的に男が吹っ飛んだ方向とは逆の方を見ると、弟の顔がった。

朝、起きると、妹が騒いでいた。

何でも、今日は兄の連と一緒に買い物に行くつもりだったのに、朝起きると連が居なくなっていたみたいだ。

置き手紙がありそこには、「しばらく出かけてきます、ちゃんと帰るので心配しないでください。」と書かれていた。

あの兄の事だ、一週間でもすれば帰ってくる。

信はいつもの様に朝風呂に入ると、最近の手に入れたムースを使って髪を整えた。

髪を整えている途中、妹の理沙が面倒くさいことになっているのが

判っていたので、どうやってなだめるかと考えたが、結局いつもの手を使うことにした。

下に降りる前に、自分の部屋から理沙のお気に入りのお菓子を一個取り、リビングに降りた。

信がリビングに行くと、理沙はテーブルにうつ伏せになってをり、信が降りてきた事に気付いた理沙は、体勢を変えずに独り言の様に信に向かって一言質問した。

「ねえ、信兄ちゃん、連兄が何処行ったか知らない」

階段を下りる前からその質問が来るのは予想していた信は、過去何回と言って来た台詞を言った。

「知らないよ、でもどうせいつもの様な山登りや、県外に出ているとか、趣味の神社巡りとかじゃないのか」

「でも、連兄が約束を破ってまで理由もなく家は出ると思えないよ、それに私見たの、お母さんやお父さんには言っていないけれど実は朝、連兄を起こしに行ったら、連兄の部屋に銀髪の女の人が居たの、それもすっごい美人のね」

しかし理沙は納得できない様で、勢いよく顔を上げ、鋭い目で信兄ちゃんの答えに反論した。

思えないよ、俺は心の中で肯定した。

確かに、連兄が約束を理由なく破るとは思えないが、連兄のことなんて正直如何でもいい、家族に迷惑をかけなければ。

そう答えたかったが、そんなことを言っていちいち火に油を注がなくてもいいと思い、理沙を慰める様に適当に当たり障りのない言葉で答えた。

「連兄のことだ、いつもの様に何となくだろうし、その美少女とやらはお前の見間違えだよ」

「見間違えじゃないもん」

信が自分の言った事を信じてくれなくて、さらに突然いなくなった兄を心配しないことに怒りを感じ、理沙は声を大きく出し反論した。しかし信は、理沙が怒っているのを無視し、さっさと連兄の隣にあ

る自分の部屋に逃げた。

自分の部屋に逃げてきてから数時間、そろそろ予定の時間になり、用意を済ませ、信は玄関に降りてきた。

「じゃあ、行ってくるよ、帰りはいつもの時間になると思うよ」

信は靴を履きながら、隣に立っている母に言うつた。

「まって信ちゃん、あなたは私とパパの大切な息子なのよ、あんな駄目な子、気に掛けるちゃ駄目よ」

母は、これまで何度も言っている言葉をまた信に言った。

信は振り返り、母の瞳をしっかりと見つめ、いつもの返事をした。

「判っているよお母さん、あんな血も繋がっていない連兄なんて、気にもしませんよ」

その返事を聞き、母は安心の顔を浮かべ、信を見送った。

ドアを開けると眩しい光があり、瞳を閉じたくなったが、俺は閉じずに視線を腕時計に向け、今の時間を確認する。

午後5時25分、いつもより少し遅いかな、でもこれ位だったら良いか。

予定より少し遅くなったが、俺は気にしないでいつもの様にジョギングしに行った。

今日は少し遠めの川に行こうかな

家の中（後書き）

どうでした、今回は出来るだけ安定した書き方をしたつもりですが、今回は連の視点からだけではなく、信の視点から家の中の様子を少し書いてみました。

これから、連の視点からだけではなくて、色々な人の視点から様々な様子を書けたらと思います。

どうぞ、文の感想や誤字などはどんどん言って下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3959p/>

運命には逆らえない

2011年1月12日21時01分発行